

ボストン学生海外研修報告：健康格差解消に向けたローカル・グローバルな視座からの学び

著者	丸谷 美紀, 米増 直美, 兒玉 慎平, 森 隆子, 稲留 直子
雑誌名	鹿児島大学医学部保健学科紀要
巻	27
号	1
ページ	63-69
発行年	2017-03-31
別言語のタイトル	Report on Kagoshima University students' overseas training in Boston: Learning about improvement of health disparities from Local and global aspects
URL	http://hdl.handle.net/10232/00029573

ボストン学生海外研修報告—健康格差解消に向けたローカル・グローバルな視座からの学び

丸谷美紀¹⁾, 米増直美¹⁾, 兒玉慎平¹⁾, 森隆子¹⁾, 稲留直子¹⁾

要旨 近年重大な課題となっている健康格差解消に向け、先駆的な実践・研究について造詣を深めるために、看護学専攻の家族看護論履修生（学部3年生）6名と保健学研究科の基礎看護・地域看護学特別研究履修生1名がボストンへ臨地研修に赴いた。平成28年7月～8月に週1回、英語で事前学習を行った後、9月3日（土）から10日（土）まで臨地研修に出向いた。視察施設は、トリニティ教会、ボストン小児病院、ボストンカレッジ、ハーバード大学、ハーバード公衆衛生大学院であり、フィールドワークによる人々の生活の視察も行った。各施設では、健康格差是正に向けた民間レベルでの草の根的な活動、看護職としての自立した活動と教育プログラム、世界レベルの研究的な取り組みを学んだ。フィールドワークでは、今なお残る人種差別を垣間見た。研修を踏まえ、学部生は健康格差への看護職の自律した活動の重要性を学び、大学院生は自己の実践を振り返り研究的に取り組む重要性を再確認した。

キーワード： 海外研修, 健康格差, ナースプラクティショナー

I. はじめに

1. 背景

看護において健康とは「われわれが持てる力を最大に活かしている状態」を指し¹⁾、看護の対象を身体・精神・社会的側面から全人的に捉えて健康を支援している。近年、社会的側面の健康への影響に注目が増し、教育・経済・流通・居住地等「健康の社会決定要因」が追究され続けている²⁾。鹿児島県は離島・僻地を抱え、地理的条件等から、経済・教育・流通等の健康の社会決定要因が整わず、都市部と比較して住民の健康に多大な格差が生じている。中でも、奄美群島は子供の貧困が報道され、看護職者として看過できない課題である。

鹿児島大学看護学専攻では、看護の問題をグローバルな視点でとらえ幅広く人々の健康に貢献できる人材、及び、離島・へき地の地域特性を活かした看護を実践できる人材の育成を目標としている。この目標に向け、3年次の「家族看護論」では、世界・日本・鹿児島における子供の貧困問題等、家族の多様な問題について学んでいる。また、鹿児島大学保健学研究科では、離島・へき地

や地域の保健医療活動の充実、向上に貢献できる人材、及び、国際保健医療活動を推進できる人材育成を目標としている。目標に向け、「基礎看護・地域看護学特別研究」の授業では、流通・教育等の「健康の社会決定要因」が、健康に多大な影響を及ぼしていることについて文献レビューを行い、討論を交えて学んでいる。

また、ハーバード公衆衛生大学院では、健康の社会格差を解消すべく、国際的に研究に取り組み、各国の対策に還元している。中でもイチロー・カワチ教授は、毎年日本を訪れ、日本の国内の健康格差について研究活動に貢献しており、日本からも多数の留学生がハーバード公衆衛生大学院を修了している。本学の学部生、並びに大学院生が、ハーバード公衆衛生大学院を視察し、教員や学生と交流することで、看護学・保健学研究に関する造詣を深めることができると考えた。また、ハーバード公衆衛生大学院の近隣施設として、ボストン小児病院、ボストンカレッジ等があり、ナースプラクティショナーによる先駆的な看護が実践・教授されている。さらに、トリニティ教会をはじめ、民間施設における健康格差解消

¹⁾鹿児島大学保健学科看護学専攻地域看護・看護情報学講座
連絡先：松成裕子
〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1
Fax : 099-275-6740
E-mail: mikimaru@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

に向けた取り組みも数多く実践されていることから、ハーバード公衆衛生大学院をはじめ、ボストン諸施設を視察することは、本学の教育目標達成に向けて有意義と思われ、本研修を企画した。

2. 研修目的

本研修は、学部学生と大学院生が同行するため、学部・大学院それぞれの目標、及び、学部学生と大学院生が同行することへの目標を、下記のように設定した。

1) 家族看護論履修生

鹿児島大学看護学専攻3年生が、本研修を通じ、人種・経済状況・資源の偏在等を含め、全人的に看護の対象を理解すると共に、幅広く家族を捉える視点を学ぶ。もって、家族看護の実践や研究に関する造詣を深める。また、鹿児島と米国の状況を突合し、共通する課題と、鹿児島に特徴的な課題を検討し、世界を見据えて家族看護のあり方について考察し、自己の看護観を発展させる。さらには、将来の進学や共同研究の準備を整える。

2) 基礎看護・地域看護学特別研究履修生

鹿児島大学大学院保健学研究科の大学院生が、研修を通じ、健康の社会決定要因に関する造詣を深める。もって、鹿児島県・日本・世界の健康格差解消の一翼を担う自覚を持って、全人的な看護の実践・追究に貢献する一助とする。

3) 家族看護論履修生、及び基礎看護・地域看護学特別研究履修生

学部3年生と、臨床での勤務経験を有する研究科大学院生が共に研修に臨むことにより、学部生は理論と実践を結び付ける一助となる。また、「学ぶ教師と教える生徒」に例えられるように、大学院生にとっては、学部生の新鮮な感性に触れることで、看護の原点に立ち返る契機となると思われる。両者が共に研修に参加することで、互いに学びを深め合う増幅効果を目指す。

II. 研修内容

1. 事前学習

平成28年6月中旬に参加者を決定した。家族看護論は学部3年生6名、基礎看護・地域看護学特別研究履修生1名をレポートにより選抜した。7月～8月に週1回、事前学習を行った。内容は、視察先のトリニティ教会、ボストン小児病院、ハーバード大学、ハーバード公衆衛生大学院等について、各自が調べた内容を英語で発表し、質疑応答する形式で学習を進めた。

2. 臨地研修内容

平成28年9月3日(土)から10日(土)まで、米国ボストンにて下記の臨地研修を行った。

1) 臨地での事前・事後学習

ボストン到着後、毎朝に視察先の事前学習内容を復習し、また視察目的を確認した。視察後には毎日、英語での説明内容の理解を補う意味からも視察内容を確認し、さらに視察内容に関する各自の学び・意見を共有した。

2) 臨地見学・研修内容

(1) トリニティ教会



写真1. トリニティ教会

トリニティ教会は1733年に設立され、地域社会への奉仕、パストラルケア(患者とその家族の心のケア)等を行っている。健康面では、Health Ministry(保健委員会)を有し、Parish Nurse(教会所属の看護師)が教会員の多様な健康問題を支援している。教会としての地域社会奉仕では、Social Justice Program(社会正義)として、経済的困窮者のために、Walk for Hunger, Sunday Night Living Bread等の食事の提供をしたり、Pine Street Innのようなシェルターを提供している。また、隔年で、教会のボランティアがホンジュラスのリンコンへの医療・人道派遣団を送っている。

本研修では、Sunday Night Living Bread(毎週日曜日の夕方に教会前の広場で、経済的困窮者のために、サンドウィッチを提供)に参加を希望していたが、Labor's Dayにあたり、活動自体は休止していたため、活動全体の説明を受けた。特筆すべきは、Street Doctorと呼ばれるJim O'Connell医師(Boston Health Care for the Homeless Program 代表)等が、経済的困窮者に必要な医療を提供していることである。筆者は千葉県と鹿児島市でホームレス支援に携わったが、これほど専心した医師には出会わなかった。ボストンと日本で、ホームレス支援に対する医師の姿勢が異なる理由は、制度の相違が大きいと思われるが、社会正義に対する使命感も関与しているように感じた。参考までに鹿児島市のホームレス支援を図1に示す。鹿児島市では毎日何らかの支援活動が行われている他、希望者は迅速に住居を提供し生活保護を開始できる。千葉県に比較し、支援が整っているためか、ホームレスの方々が穏やかで優しいと感じる³⁾。

日	月	火	水	木	金	土
10月30日	31日	11月1日	2日	3日	4日	5日
14:00~ 県民交流センター 料理会・健康相談会 おにぎり配り	11:00~ 甲斐川左岸緑地 おにぎり配り	17:00~ 中央公園 おにぎり配り		17:00~ 甲斐川左岸緑地 おにぎり配り		19:00~ ザビエル公園 おにぎり配り
6日	7日	8日	9日	10日	11日	12日
17:00~ 甲斐川左岸緑地 おにぎり配り	11:00~ 甲斐川左岸緑地 おにぎり配り	17:00~ 中央公園 おにぎり配り		14:00~ 教育会館 シャワー	17:00~ 甲斐川左岸緑地 おにぎり配り	19:00~ ザビエル公園 おにぎり配り
13日	14日	15日	16日	17日	18日	19日
17:00~ 甲斐川左岸緑地 おにぎり配り	11:00~ 甲斐川左岸緑地 おにぎり配り	17:00~ 中央公園 おにぎり配り		14:00~ 教育会館 シャワー	17:00~ 甲斐川左岸緑地 おにぎり配り	19:00~ ザビエル公園 おにぎり配り
20日	21日	22日	23日	24日	25日	26日
17:00~ 甲斐川左岸緑地 おにぎり配り	11:00~ 甲斐川左岸緑地 おにぎり配り	17:00~ 中央公園 おにぎり配り		14:00~ 教育会館 シャワー	17:00~ 甲斐川左岸緑地 おにぎり配り	19:00~ ザビエル公園 おにぎり配り
27日	28日	29日	30日	12月1日	2日	3日
14:00~ 中央公民館 料理会・健康相談会 おにぎり配り	11:00~ 甲斐川左岸緑地 おにぎり配り	17:00~ 中央公園 おにぎり配り		14:00~ 教育会館 シャワー	17:00~ 甲斐川左岸緑地 おにぎり配り	19:00~ ザビエル公園 おにぎり配り

図1. 鹿児島市ホームレス支援スケジュール

(2) ボストン小児病院

ボストン小児病院は1869年に設立され、入院者数15,748、手術件数入院6,795、外来手術19,747、救急外来受診者数58,782で、Best Children's Hospitalを連続して受賞している。外来を入った目の前の壁一面がスクリーンになっており、世界各国の子供たちが描かれていた。階段が musical stairs になっており、階段を昇降するたびに楽しい音楽を奏でた。また、配膳ロボットがおり各病室に食事を届ける。院内TV局やレクリエーションも充実しており、治療の提供のみならず、子供の心身の発達に配慮がなされていた。



写真2. ボストン小児病院

施設見学ののち、教育担当の Marilyn Moonan に、ボストン小児病院におけるナースプラクティショナーについて説明を受けた。ナースプラクティショナーの資格を取得するためには、一定の看護師経験を積んだ後、大学院等で所定の単位を取得することが求められ、ウィメンズヘルス（女性の健康）、小児、高齢者、精神、急性期の5つの領域のほか、救急、家族、新生児などの領域がある。ボストン小児病院では、受講のための奨学金も支給される。具体的な活動を説明してくれた3名は、ボストンカレッジ大学院で修士を終了・在籍中である。近年

は、子供の精神看護領域のナースプラクティショナーの必要性が高まり、自殺や摂食障害等、複雑な健康問題に対する看護を提供している。

(3) ボストンカレッジ看護学部

ボストンカレッジは1863年に創立されたボストン市内で最も古い大学で、現在は郊外のチェストナット・ヒル地区にある。ビジネス学部、看護学部、教育学部など、4つの大学学部、7つの大学院研究科がある。図書館18棟、学習資料センター、美術ギャラリー、プラネタリウム、ラジオ局、TV局、フットボールスタジアム、アイスホッケーアリーナ等の施設がある。

校内視察後、看護学生の技術演習を見学した。個室を想定した演習用ベッド10台程度があり、各ベッドにおいて学生が二人一組でフィジカルアセスメントを行い、教員が巡回指導していた。学生個別の技術確認はシナリオに沿って看護を展開するOSCEを行っており、見学の最中も、学生が技術確認後、教員と個別面接を行っていた。

大学院のナースプラクティショナーのコースは、成人・高齢者、家族看護、麻酔、小児、精神、母子保健があり45単位を修める必要がある。米国内各地から入学生が来ており、また日本人留学生もいる。

授業見学後、ナースプラクティショナーに関する説明を Holly 助教と学部長から受ける。この際、看護理論家のシスター・カリスタ・ロイ教授が同席され、筆者をはじめ引率教員も学生も感極まった。ロイ教授は終始穏やかで謙虚であり、尊大な態度は微塵も見せず、看護職のあるべき姿を学生に示してくださった。



写真3. シスター・カリスタ・ロイと

本学の学生から、ナースプラクティショナーが開業できたり、医療施設内でも医師の指示なしに独自に判断して医療行為を提供できることについて、「医師との違いは何か」と質問があった。Holly 助教の回答は「生活に密着した処方ができる」であり、ロイ教授は「医師と同

じことをしても看護の目的で行う。また、医師に私たち看護職ができることを示すことで、医師にはもっと高度な医療に専念してもらうことができる」という回答で、究極のところ看護職の看護観が問われるということだった。

(4) ハーバード公衆衛生大学院

Longwood 地区視察

ハーバード公衆衛生大学院博士研究員（ポストドクター）の案内により、ハーバード医療施設が林立する Longwood を視察した。医学部・歯学部を取り囲むように、国内屈指の病院としてブリガムアンドウィメンズ病院、ボストン小児病院、ベスイスラエル・ディーコネス・メディカルセンター等がある。通常ハーバード医学系大学院に留学すると、所属先は病院になり、研究室がそれぞれ病院にある。

糖尿病センターも独立しており、米国における糖尿病の深刻さがうかがえた。欧米は寄付の習慣が根付いており、Longwood でも現地の Redsocks 球団が多額の寄付をしている。地区の図書館には国際誌 Social Science & Medicine の編集部があり、本研修で面談させていただいたイチロー・カワチ教授が編集委員長を務めている。医学部周辺には芝生に覆われた前庭や広場があり、入学・卒業式等の式典が行われる。前庭の地下には巨大な地下駐車場があり、ゆったりとした景観を醸し出すのみならず、機能面も強化されている。

ハーバード公衆衛生大学院は、1946年に創設された。2015年に、T.H. Chan 氏から多額の寄付を受け、名称を「Harvard T.H.Chan School of Public Health」と変更したということで、ハーバードの卓越した経営戦略が伺えた。

イチロー・カワチ教授との面談

イチロー・カワチ教授の研究室で、健康格差・健康の社会決定要因・ソーシャルキャピタル等の説明を受けた。研究室は木調で明るく、ワインが飾ってあった。世界的に著名な研究者であるにもかかわらず、「ケーキ食べませんか」と、笑顔で気さくに語りかけて下さり、世界各国から入学生が絶えないのも頷けた。イチロー・カワチ教授は、ニュージーランドで内科医として勤務されていた当時、状態が悪化してから受診する患者を多数診療し、早期に遡って人々を救うことはできないかと思いあぐねた。そんな折、ニュージーランドの喫煙に関する記事を読み、年間のたばこ関連の死が交通事故の死と同数であることを算出し、ニュージーランド政府に禁煙強化の必要性を訴えられた。以来、リサ・バークマンらと社会疫学研究に取り組み、健康格差の解消・social capital 等を追究されている。特に日本の平均寿命の長さを、social capital の観点から解明に取り組んでおられる。



写真4. イチロー・カワチ教授のオフィスにて

社会疫学研究 授業見学

イチロー・カワチ教授の社会疫学研究の授業を見学させていただいた。大学院生100名程度が出席する広々とした教室で、授業を受けさせていただいた。交絡因子に関する統計学的内容だったが、タイタニックの海難事故に結びつけた説明で、本学の学部3年生にもわかりやすい説明だった。授業全体が、受講生との活発な討論により進められ、日本に多い「受講生は聞き役」の孔子スタイルとは異なり、対話型授業で我々は引き込まれていた。



写真5. 授業でのイチロー教授

休憩時間には、世界各国からの受講生が積極的に本学の3年生に話しかけてくれ、これもまた日本の学生との

違いを感じた。英語での会話もあったが、中には「夫が日本人なの」と流ちょうな日本語で語りかける受講生もいた。数名の日本人留学生からも話しかけていただき、千葉大学大学院、京都大学大学院等からの留学ということで、大変刺激になったようである。

日本人留学生との交流

日本各地から、看護・医学・歯学・教育学等、多様な学問分野から、Brigham and Women's Hospital and Harvard Medical School やハーバード公衆衛生大学院に留学している方々と交流させていただいた。研究テーマや家族形態も多様ではあるが、医学や公衆衛生を追究する情熱に本学学生・大学院生は感銘を受けていた。

交流の中では、本学3年生に「ジャンクフードを避ける食文化を育成するのと、ジャンクフードを規制する政策と、とどちらが効果的か」という疑問を投げかけて、思考を促して下さった。また、Longwood 周辺を案内して下さいたり、夕食をご一緒させていただいたり、大変親切にいただいた。イチロー・カワチ教授が大変な努力家であること、家族を大切にしていること、愛飲家としての一面等、素顔も教えていただいた。

(5) ハーバードケンブリッジキャンパス

ハーバード大学は、イギリス植民地時代の1636年に設置された米国の歴史より古い大学である。正門ジョンストンゲート正面のユニバーシティホールの前には、ジョン・ハーバードとされる像がある。数多くの著名人が卒業している。女子学生はラドクリフ・カレッジ（ハーバード大学と提携した女子大学）に在籍していたが、1999年に完全に吸収されラドクリフ研究所となった。

(6) フィールドワーク

ボストンには、多数の総合・単科大学があり、高等教育の中心地であるとともに、医療の中心地でもある。その他、ボストン美術館や高級な商店が林立し、経済的・文化的中心地である。市内随所に広々とした公園があり、家族や友人が連れ立ってくつろいでいた。その一方で、「Black Life Matter」と書かれた看板が散見し、根強い人種差別もうかがえた。

3. 事後学習

臨地研修終了後に、各自で報告書をまとめた後、学内報告会に向けて準備を整える中で6名全員で経験を振り返り、学びを共有した。

Ⅲ. 評価

1. 目標到達度

家族看護論履修生：ハーバード公衆衛生大学院への視察により、離島・僻地の経済格差等への関心を含め、看護の対象の社会的側面への理解も促されたようである。

学生は「ソーシャルキャピタルの醸成が健康格差是正の一助となり、トリニティ教会のような地域の中核となる存在が重要である」と、視察した施設相互を関連付けて考察を深めていた。ヘンダーソンは「病院は患者が生活から切り離されている」と嘆き、訪問看護婦を選んだ⁴⁾。病院においても、患者を社会的側面から捉え、ケアを提供する原則を今後も持ち続けてくれることと思う。また、自律した看護職としてナースプラクティショナー・ショナーへの関心が高まった。学生は「身体・精神・社会・スピリチュアルな側面から対象を支援する看護の役割を再確認した」と、看護の幅広さを捉えていた。一部学生の大学院進学への関心も高まった。

基礎看護・地域看護学特別研究履修生：ナースプラクティショナー・ショナーの役割を学び、日米を比較し、看護職の地位や自身への誇りの点において日本も見習うべきことを学んでいた。ハーバード公衆衛生大学院での学びと併せて、自己の研究課題である「退院後を見据えた看護」に多大に示唆を得たようで、地域づくりが鍵であることを述べていた。

家族看護論履修生と基礎看護・地域看護学特別研究履修生が同行することで、学部生は大学院生の実践経験を学ぶ機会となり、大学院生は学部生への指導力を高めたようである。

2. 研修内容

1) 事前学習

視察先を想定して英語で事前学習したことは、英語の理解も含めて効果的だった。経済的弱者への支援について想像しにくい面もあったようなので、鹿児島島のホームレス支援等を見学する等の事前学習も必要だったと思われる。また、人々の暮らしを効果的に把握するために community as partner model 等のフィールドワークの視点を事前に整理してから研修に臨むことも必要だった。

2) 臨地研修

言葉の壁に対する懸念があったが、学部学生も堂々とイチロー・カワチ教授やシスター・カリスタ・ロイ教授に質問・コメントしていた。フィールドワークでは、電車等の移動中の人々の様子も観察できていたが、ボストンという洗練された街への感動の方が強かったようである。

3) 事後学習

研修終了直後から学部生は実習に入ったため、十分な振り返りの時間はとりにくかった。今後は研修時期を検討し、研修の事後学習の時間を確保していきたい。

3. 今後の課題

研修内容を充実していくと共に、学生と教員の研修資金が安定して確保できるシステムを整えていく必要がある。

【謝辞】

研修を受け入れてくださった諸施設の先生方，資金援助をいただきました鹿児島大学学長先生はじめ御担当の先生・事務の方々，留守をお預かりくださった専攻と講座の先生方に感謝をささげます。

本研修は，鹿児島大学学生海外研修支援事業の助成を受けて行った。

【文献】

- 1) ナイチンゲール：薄井担子ほか訳. 病人の看護と健康を守る看護. 現代社. 1974
- 2) 近藤尚己：健康格差対策の進め方：効果をもたらす5つの視点. 医学書院，東京，2016
- 3) NPO 法人かごしまホームレス生活を支え合う会，
<http://www5.synapse.ne.jp/supporter/synapse-auto-page/index.html>，2016.12.16
- 4) ヴァージニア・ヘンダーソン：ヴァージニア・ヘンダーソン選集 看護に優れるとは (エドワード J. ハロラン編，小玉香津子訳)，医学書院，東京，2007

Report on Kagoshima University students' overseas training in Boston -Learning about improvement of health disparities from Local and global aspects-

Miki Marutani¹⁾, Naomi Yonemasu Acdan¹⁾, Shimpei Kodama¹⁾, Ryuko Mori¹⁾, Naoko Inadome¹⁾

1) Department of Community Health Nursing, School of health Sciences, Faculty of Medicine,
Kagoshima University, Sakuragaoka 8-35-1, Kagoshima City, 890-8544 Japan

Address correspondence to: Miki Marutani,
8-35-1 Sakuragaoka, Kagoshima City, 890-8544, Japan
Tel&Fax: 099-275-6740
E-mail: mikimaru@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

Abstract

To learn trailblazing work about improvement of health disparities which has been crucial issues around the world, we conducted overseas training in Boston. Attendees were six undergraduate students of Family Nursing class and one master student of Advanced Research in Fundamental Nursing and Community Health Nursing. Weekly preparations for overseas training were conducted in English from July until August, after that, we visited Boston from September 3rd to 10th 2016. The institutions of training trip were Trinity church, Boston Children's Hospital, Boston College, Harvard University and Harvard T. H. Chan School of Public Health. We also observed lifestyles of people by field works. Students learned about grass-roots activities by private section, the educational programs for autonomous nursing, and global researches for improving health disparities. Also, we caught a glimpse of racial discriminations. The undergraduate students learned the importance of autonomy in nursing to decrease health disparities. The master student reconfirmed the gravities of clarifying the implicit nursing skills.

Key words: overseas training, health disparities, nurse practitioner